

日蓮大聖人御書全集

しいじのしろうどのごしよ

椎地四郎殿御書

新版  
1720  
ゝ  
1721

しいじのしろうどのごしよ

# 椎地四郎殿御書

しいじのしろう

椎地四郎

せんじつおんものがたり

こと

か

ひと

かた

あいたず

そうら

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いしと

おお

そうら

すこ

違

そうら

ころ、仰せ候いしがごとく少しもちがわず候いき。これ

励

ほけきよう

くどく

えたも

につけても、いよいよはげまして法華経の功德を得給うべ

しこう

みみ

りろう

まなこ

き

み

たま

し。師曠が耳・離婁が眼のように聞き見させ給え。

まつぼう

ほけきよう

ぎようじやかなら

しゅつたい

末法には法華経の行者必ず出来すべし。ただし、大難

きた

ごうじよう

しんじん

よろこ

ひ

たきぎ

来りなば、強盛の信心いよいよ悦びをなすべし。火に薪

加

盛

をくわえんに、さかんなることなかるべしや。大海へ衆流入

たいかい

しゆるい

る。されども、大海は河の水を返すことありや。法華大海の

ぎようじや

しよが

みず

だいなん

い

返

行者に諸河の水は大難のごとく入れども、かえすこと、

答

しよが

みずい

たいかい

とがむることなし。諸河の水入ることなくば、大海あるべ

だいなん

ほけきよう

ぎようじや

てんだい

からず。大難なくば、法華経の行者にはあらじ。天台云わ

しゆる

うみ

い

たきぎ

ひ

さか

とううんぬん

く「衆流、海に入り、薪、火を熾んにす」等云々。

ほけきよう

ほうもん

いちもんいつく

ひと

語

かこ

法華経の法門を一文一句なりとも人にかたらんは、過去

しゆくえん

思

きよう

い

しよほう

の宿縁ふかしとおぼしめすべし。経に云わく「また正法

き

ひと

ど

がた

うんぬん

もん

こころ

を聞かず、かくのごとき人は度し難し」云々。この文の意

しよほう

ほけきよう

きよう

聞

ひと

ど

は、正法とは法華経なり、この経をきかざる人は度しが

たしという文なり。もん

ほっしほん

法師品には「もしこの善男子・善女人乃至則ち如来の使

ぜんなんし

ぜんによにんないしすなわ

によらい

つか

と

たま

そう ぞく

あま

おんな

いづく

いなり」と説かせ給いて、僧も俗も、尼も女も、一句をも

ひと

語

ひと

によらい

つか

み

きへん

ぞく

人にかたらん人は如来の使いと見えたり。貴辺すでに俗な

ぜんなんし ひと

きよう

いちもんいづく

ちようもん

り、善男子の人なるべし。この経を一文一句なりとも聴聞

たましい

染

ひと

しろうじ

たいかい

わた

ふね

して神にそめん人は、生死の大海を渡るべき船なるべし。

みようらくだいしい

いづく

たましい

そ

ひがん

妙楽大師云わく「一句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸

たす

しゆい

しゆじゆう

なが

しゆうこう

ゆう

うんぬん

しろうじ

を資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり」云々。生死

たいかい

わた

みようほうれんげきよう

ふね

の大海を渡らんことは、妙法蓮華経の船にあらずんば、

かなうべからず。

ほけきよう によととくせん わた ふね え

そもそも、法華経の「如渡得船（渡りに船を得たるがご

ふね もう きようしゆ だいかくせそん ぎようちむへん

とし）」の船と申すことは、教主・大覚世尊、巧智無辺の

ばんしよう し み はつきよう ざいもく と あつ しようじきしやごん

番匠として、四味八教の材木を取り集め、正直捨権と

削 じゃしよういちによ 切 あ だいごいちじつ 釘

けずりなして邪正一如ときり合わせ、醍醐一実のくぎを

ちよう 打 しようじ たいかい 押 浮 ちゆうどういちじつ

丁とうつて、生死の大海へおしうかべ、中道一実の

帆 柱 かいによさんぜん ほ 揚 しょほうじつそう 追 風 得

ほばしらに、界如三千の帆をあげて、諸法実相のおいてをえ

いしんとくにゆう いつさいしゆじよう と 乗 しゃかによらい 舵

て、以信得入の一切衆生を取りのせて、釈迦如来はかじを

と たほうによらい 綱 手 と たま じようぎようとう しぼさつ

取り、多宝如来はつなでを取り給えば、上行等の四菩薩は

かんがいそうおう

漕 たも

ふね

によととくせん

函蓋相応してきりきりとこぎ給うところの船を、「如渡得船」

ふね もつ

の船とは申すなり。

乗

もの

にちれん

でしだんなとう

よ

よ

しん

これにのるべき者は、日蓮が弟子檀那等なり。能く能く信

たま

じさせ給え。

しじようきんごどの

げんざんそうら

よ

よ

かた

たま

そうら

くわ

四条金吾殿に見参候わば、能く能く語り給い候え。委し

もう

そうろう

きようきようきんげん

くは、またまた申すべく候。恐々謹言。

しがつにじゆうはちにち

にちれん

かおう

四月二十八日

日蓮

花押

しいじのしろうどの

椎地四郎殿へ